

別記様式

会議結果報告書

令和5年7月19日

会議の名称	第6回志木市小中一貫教育推進委員会
開催日時	令和5年6月7日（水）午後3時30分～午後5時15分
開催場所	志木市役所2階中会議室2-1及び2-2
出席委員	安原輝彦委員長、本荘真副委員長、小木曾久美子委員、 松本秀之委員、小暮孝明委員、林孝安委員、西浦建貴委員、 若杉一輝委員、久保大地委員、船平舞委員、小林博和委員、 湯本恭規委員、本間健委員 <p style="text-align: right;">（計13人）</p>
欠席委員	菊原英之委員、上野耕平委員 <p style="text-align: right;">（計2人）</p>
説明員職 氏名	川瀬学校教育課指導主事 小中一貫教育推進統括校長（各中学校区）
議 題	● 小中一貫教育推進計画（案）の中間報告について
結 果	別紙、審議内容の記録とおり
事務局職員	柚木教育長、今野教育政策部長、 島村教育政策部次長兼学校教育課長、 成田教育政策部参事兼教育総務課長、土崎生涯学習課長、 川瀬学校教育課指導主事、三好学校教育課指導主事、 原田学校教育課参与、亀和田学校教育課主査 コアネット教育総合研究所（コンサルタント） 松原所長、中村横浜研究室室長補佐、 熱海研究員、稲益研究員

審議内容の記録（審議経過、結論等）

会議の開始前に会議の公開及び傍聴者の有無について確認を行った。

→傍聴者 5名

1 開会

2 議題

● 小中一貫教育推進計画（案）の報告について

各学校区で検討されてきた小中一貫教育推進計画（案）についての報告を行った。共通する項目である、「はじめに」、「1 基本的な考え方」、「5 教育委員会の取組」の箇所について、それぞれの内容を事務局から説明を行った。

続いて、志木中学校区、宗岡中学校区、宗岡第二中学校区、志木第二中学校区の順で、小中一貫教育推進統括校長からそれぞれの中学校区の小中一貫教育推進計画（案）（2～4項の内容）の中間報告を行った。

【以下質疑】

<志木中学校区について>

（委員）

対面でのやりとりを重視しているということだが、志木小学校は立地が離れている。教職員の日頃のコミュニケーションは分科会以外で取れているか。また、取るための方法は何か検討されているか。

（校長）

小学校同士の連携は力を入れていかなければいけないと考えている。

日頃のコミュニケーションとして、あいさつ運動では志木第三小学校の児童が志木中学校に来て実施する、または志木中学校生徒が志木第三小学校へ行き実施することによって交流している。昨年度からは志木小学校の卒業生である志木中学生が、登校時に志木小学校へ行き、あいさつ運動を実施するなどして交流している。なお、その場には教員も参加している。

その他、合唱の発表などきっかけに小学校同士の交流ができないか検討しており、小学校同士の連携もより良い形で行いたいと考えている。志木中学校においても志木第三小学校との交流に偏らないように常に意識を持って取り組むようにしたいと考えている。

(委員)

「文武両道」とあるが、3校合同のスポーツ大会の開催は考えているか。

(校長)

まだ十分に検討できていないが、現状では教職員の研修会でスポーツレクを行うなど検討したい。学校を越えて教職員同士が仲良くなることが重要と考えている。ひいては児童生徒にも波及できればと考えている。

(委員)

小中一貫教育に関する分科会を平日の日中に行っていることにより、児童生徒が早めに帰宅していると思うが、授業時数についてはどのようなになっているか。

(校長)

年間で計画し、授業時数に不足が生じないように行っている。

(委員)

意見として、児童生徒同士の交流の取組など、これから計画がブラッシュアップされる可能性があるのであれば、その文言を入れてはどうか。

(校長)

ご意見として受け止めたい。

<宗岡中学校区について>

(委員)

小学校はティーム・ティーチングを行っていると思うが、中学校でも行っていくのか。

(校長)

本中学校区では、中学校教員が小学校に行き指導する活動を昨年度と今年度実施している。また、小学校の6年生時の担任の先生が、中学校1年生の姿を見に来ることができるように推進しているところである。

中学校でのティーム・ティーチングは、教科担任制であるため難しいが、加

配を活用できる教科ではチーム・ティーチングをしている。また、「生きる力推進講師」を活用し、中学1年生、2年生の数学では、毎時間ではないがチーム・ティーチングを実施している。

(委員)

宗岡中学校区では学校間にバイパス道路が通っているが、小学校同士の交流は昔から行われており、小中一貫教育でさらに交流が増えるものと考えている。地理的な問題でオンラインでの交流も考えられると思うが、対面での実施を検討しつつ、オンラインでもより質の高い交流ができるよう検討して欲しい。

(委員長)

教育委員会とも協力し、検討する。

<宗岡第二中学校区について>

(委員)

「むねおか学」が素晴らしいと思っている。宗岡に焦点化して、9年間で体系づけられていて良い。

(委員)

独自の書式を使っていてとても良い。また、具体的な内容を書いているので良いと思う。書式はもともと市で決まっていたのか。

(事務局)

書式は示していたが、書式を示す前からすでに各中学校区で作成を進めていただいていたので、今回は作成されていたものを出していただいた。フォーマットについて検討していくが、市として誇れるものになれば良いと考えている。

(委員)

地域との関わりはどうか。推進計画を作るうえで、どのような熱い思いや、地域の声があったのか。

(校長)

地域の承認を得ながら進めていった。各学校運営協議会において様々なご意

見はいただくが、「応援するよ、賛同するよ」というあたたかい声をいただいている。3校合同の運営協議会においては、「むねおか学」について賛同いただいている。中には「協力できることがあれば言って欲しい」という声のほか、「地域を活性化するために良いのではないか」という声もいただいている。学校としては「将来宗岡に戻ってきて宗岡で活躍して欲しい」というねらいも込めて「むねおか学」を提案している。その点について「地域に貢献するというねらいに合っているのではないか」というご意見もいただいている。

そうした地域の方の声が、教職員のモチベーション向上にも繋がっている。

(委員)

学校運営協議会にも参加しているが、内容の表現について、「チャレンジ」という言葉に対して「挑戦する」という表現にしてはどうかなど、言葉の定義について、前向きな表現になるように熱心な議論が行われていて良かった。

(委員)

小中一貫教育スタート時にまだ在籍している小学校の児童に意見・アイデアをもらって学園名を決めようとしていることが良い。楽しみだな、と思える。

<志木第二中学校区について>

(委員)

2点質問したい。小学校5年生段階で、50分授業になるのはどうしてか。また、「生徒指導問題の温床の根絶」の部分は前期課程・後期課程の表現になっているが、志木第二中学校区が考える学年段階の区切りである4-3-2制での表現にしていないことに意図はあるのか。

(校長)

50分授業は案の段階で、理由の1つとしては5年生、6年生が同じ施設内で学校生活を送ることになった場合のチャイムの兼ね合いもある。前期課程・後期課程の記述に関しては、小学校段階・中学校段階で捉えた場合の表現であり、系統性を意識した積極的な生徒指導を行っていく。

(委員)

50分授業になり、従来より授業時間が5分増えることで期待されることは

何か。

(校長)

授業の振り返りの時間の確実な確保につながる。また授業全体のデザインの幅が広がることにもつながる。

(委員)

大学では長時間授業が行われている。50分授業を受けることで、大学進学後も見据えて、集中力を鍛える機会になれば良いと感じる。

(委員)

志木第二中学校区ではボランティアによる国際理解教育を実施しており、こうした取組も続けば良いと考えている。また、キャリア教育の視点では、50周年記念授業の際に世界で活躍する卒業生（オリンピックドクター）による講演を実施した。特別支援教育や不登校問題などについては、より充実を図って欲しいと考えている。医療連携などのほか、別室登校も難しい不登校の児童生徒への配慮（入りやすい教室の設置など）も検討して欲しい。

(委員長)

本日のこれまでの意見を中学校区に持ち帰っていただき、中学校区内で共有して欲しい。そのうえで再度検討することもあると考える。支えていただくのは保護者、地域の方々である。保護者、地域の方々と共に検討を進めていただきたい。

<全体について>

(委員)

要望として、先生の加配をお願いしたい。

(事務局)

受け止めていきたい。

(委員)

小中一貫教育について保護者や市民にどのように周知していくのか。この話

し合いの周知はどのように行っていくのか。

(事務局)

折に触れて周知を行っていく。保護者説明会、ホームページ、メール配信、広報誌、学校だよりなどを有効に活用しながら、小中一貫教育スタート前から、きめ細かに情報を発信していきたい。

(委員)

先生方の学校を越えた交流がすでに行われていると思うが、それによる効果は実感しているのか。

(校長)

音楽の授業では中学校の先生が小学校の授業に関わることにより、指導方法の統一化がなされ、中学進学後の授業がやりやすく、質の高い指導が実現できるようになったという声を聞いている。また、学校外で起きたトラブルについても、学校を越えた連携が取りやすく、スムーズに対処することができたという事例もある。今年度の事例の中では、小学校同士の交流の中で、一方の小学校のグラウンドに児童が遊びに行くという活動を通して、児童の交流を図ることができた。そうした活動の中で児童から「次はそっちのグラウンドに遊びにいこう」という声が上がった。教員も児童の希望に応じないわけにはいけないので、同じ中学校区内の小学校の教員同士が即座に連携し、企画をするなど、児童にとっても教員にとっても良い交流の機会になっている。

現段階の様子を見ていても、児童生徒の利益につながるだけでなく、教員同士のコミュニケーション活性化につながっていると感じている。

(委員)

令和7年度の小中一貫教育のスタート以前から、教員同士が連携を意識しながら取り組んでいただけのことは、児童生徒の利益につながっていくと思う。先生方も忙しく時間もない中で大変だということは十分承知しているが、中学校区間の教員のつながりを意識しながら進めてほしい。

(委員)

現在、6-3制を取っている学校が4-3-2制に切り替えることはあるのか。

(校長)

先日、教職員を対象とした小中一貫教育に係る研修を実施し、東京大学の藤江先生に御講演いただいた。その中で学年段階の区切りの考え方についても触れていただいたが、「内容によって柔軟に変えても良い」という話があった。

区切りありきで考えるのではなく、児童生徒の実態を踏まえて柔軟に考えていくことができると考えている。

(教育長)

4つの中学校区の皆様におかれましては、御説明ありがとうございます。

本日ご提案いただいた内容について、教育委員会としてはしっかり受け止めていきたい。学年段階の区切り、授業時数については、他自治体事例を見ると様々であり、柔軟に対応しているようである。小中一貫教育それ自体が目的なのではなく、あくまでも手段として捉え、質の高い教育を実現したいと考えている。

本日示された各中学校区の推進計画（案）を作成する過程では、濃密な議論が行われてきたものと推察する。関わった方々には改めて感謝申し上げたい。議論の過程では、新たな課題が見つかることもあったのではないかと。教員の働き方改革、部活動改革、これらも考えなければならない。小学校、中学校の教職員が議論し合い、見直していく必要がある。

今回の案では、ソフト面が中心であったが、ハード面に目を転じると、特に志木第二中学校区における学校施設は、距離、移動、交流、時間、スペースといった視点で施設のありようを考えていかななくてはならない。そういった点で、異学年の交流や特別教室の移動などを想定したうえで安全で機能的、効率的な導線を担保した施設づくりが必要があり、これには、それなりの時間を要すると想定している。

義務教育の9年間がその後の子どもたちの成長に大きく関わる。義務教育の質の向上という大きな目的を達成するために、小中一貫教育を推進したい。

特に義務教育学校の設置にあたっては、小中一貫教育の趣旨に沿って考えていかななくてはならないため、実施時期にとらわれて、結論を急ぐことなく、保護者、地域の方と一緒に着実に進めたいと考えている。

以上